

瀬戸内周遊の旅へ—2017年暮、鞆の浦、尾道、松山—

高橋 祐吉

はじめに—さまざまな旅の形—

専修大学の人文科学研究所の所員になってから、いったい何年が過ぎたのだろう。今ではそれさえも判然としない。これまでまさに文字通りの幽霊会員であったのだから、当然と言えば当然である。毎年求められる所員の消息欄への寄稿にも、一度も応じたことがなかったし、同じように、毎年企画されてきた調査旅行にも一度も参加したことがなかった。参加したいと思ったことが二、三度あるにはあったが、年末に企画されることが多かったり、あるいはまた、あれこれの用事と重なってしまい都合がつかなかったこともあって、参加は叶わなかった。せいぜい月報や年報に収録された論文のなかで、興味がそそられたものを斜め読みしてきただけである。

そんな、人文研との関係では余りにも不真面目だった自分が、今回企画された調査旅行に突然参加する気になったのは、一体何故なのだろう。定年前に一度ぐらいはこうしたものに顔を出してみるのも悪くはなかろうと考えるに至ったのは、きっとどこかに、これまで専修大学で過ごしてきた時間に「中締め」をして、次の残された（それほど時間が残されているとも思えないのだが…）人生に向けて踏ん切りを付けておきたいといった気持ちが働いていたからに違ひなかろう。そんな訳で、人文研での最初のそしてまた最後となる旅に加わることにした。

昨年は、年初からそんな気分が濃厚だった所為なのか、いつもの自分には珍しく一年を通してあれこれのところにしかけた。3月初旬には、高松地区労からの講演依頼を受けて高松に出かけた。いつもなら面倒に思って辞退するところだが、こんな依頼で出かけるのも今回が最後だろうと思い、意を決して出向いてみたのである。空港では、「つつるのうどん」などと書かれた看板に迎えられ、禿頭の私は一人苦笑した。苦笑と言え、市内の中央公園には高松出身の菊池寛の巨大な銅像が建っており、政治家でもあるまいにと思って、こちらにも苦笑した。講演を終えた翌日には、フェリーに乗って小豆島まで足を伸ばし、「二十四の瞳映画村」にある壺井栄文学館にも寄ってみた。そこには、同じ小豆島出身の二人の作家、後に栄の夫となる詩人の壺井繁治や、「櫓」や「渦巻ける鳥の群れ」で知られるプロレタリア作家黒島伝治についても紹介されていた。そこで手に入れた栄の年譜によれば、1936年に夫の繁治は転向後の失意の中で、栄とも親しい中野鈴子（中野重治の妹で詩人）と不倫関係に陥り、栄は大きなショックを受けたとあった。初めて知った出来事だった。

同じ3月には社会科学研究所の一行に加えてもらって、日韓の広域経済圏と歴史を巡る調査旅行に出かけ、釜山から玄界灘を渡って対馬と太宰府を回ってきた。経済学部で長年「労働経済論」を担当してきたにも拘わらず、私が興味を抱いていたのは、「広域経済圏」ではなくて「歴史」の方ではあったのだが…。この調査旅行に関しては、社会科学研究所の『月報』(649・650合併号)に少し長めのエッセーを書かせてもらった。誰に遠慮することもなく、書きたいことを書きたい時に書きたいだけ書くというのが、定年後の愉しみの一つであるが、その予行演習のようなエッセーとなった。もともと海外旅行にそれほどの興味は無いので、これが最後の海外旅行になりそうな気配もあった。

定年後は研究活動に終止符を打つことにしていたので、学会参加もこれが最後だと思い、6月には諏訪の東京理科大で開かれた労務理論学会にも顔を出した。実に久しぶりの学会である。知り合いの女性の案内で、霧ヶ峰高原あたりを散策したり、この年の2月に亡くなった多辺田政弘さんの娘さん夫婦と奥さんがやっている日本料理の店「連」にまで出向いてみた。俳句とおしゃべりそれに女人が大好きだった彼を偲んで、「「連」出でて声ばかり聞く春の蟬」などといった句を詠んでみた。俳号を青魚と称し、天衣無縫の斬新な句をたくさん詠んだ多辺田さんには笑われそうな気もしたが…。私が好きな彼の句は、「そう言えば春になくしたものばかり」であるが、まるでこの句のように、彼自身がまだ肌寒い早春の日一人旅立ってしまった。

7月末から8月にかけては、毎年恒例となった感のある、ふるさと福島の復興支援を兼ねた温泉旅行に出かけた。今年は、高校時代の友人たちと磐城にある塩屋崎に2泊し、そこを拠点にして浪江にまで足を伸ばしてみた。塩屋崎の灯台は、映画「喜びも悲しみも幾年月」(監督木下恵介、1957年)の舞台となったことで知られている。崖の上に立った美しい灯台である。昨今は映画の話はすっかり忘れられて、美空ひばりの「みだれ髪」に「憎や 恋しや 塩屋の岬」と歌われたことばかりが「売り」になっているようで、いささか興ざめな気もしないではなかったが…。そう言えば、人影もない浪江駅前には、「桑港のチャイナタウン」や「アルプスの牧場」、「高原の駅よさようなら」等のヒット曲の作曲家で知られる佐々木俊一の碑が、ひっそりと建っていた。

大震災から6年も経っていたので、浜通りの幹線道路だけは通れるようになっており、浪江の駅にも電車が数本通うようになってはいたが、それ以外の場所は依然として立ち入り禁止区域である。放射能汚染の不安に怯えて住民も戻っていないので、浪江の駅周辺の建物は3.11当時のままに放置しており、無残としか言いようの無い無気味な姿を曝け出していた。三陸とはまた違った悲しみの光景である。中筋純の写真集『かさぶた』(東邦出版、2016年)を開くと、東京オリンピック開催の「出し」にされ、そしていつの間にやら用済みとなって、隠蔽され忘却されようとしているその惨状が、余すところ無く写し撮られている。

そんなところに足を踏み入れた所為なのか、帰路に立ち寄った「草野心平記念文学館」では、文化勲章まで受賞した心平よりも、彼の弟で夭折した天平の方に興味がわいた。文学館の片隅に建てられていた彼の詩碑「一人」には、「見ても誰もみない／本を伏せる／家を出て山を見れば／山はやはり山」とあり、その先には磐城平のなだらかな山並みが見晴るかされた。福島に戻ってから、件の友人たちとともに、先生の子息夫妻の案内で高校時代の恩師の墓参りもした。私はその時初めて、先生がクリスチャンであったことを知った。先生は1960年代の中頃に冊子『麦』を自力で発行されていたが、もしかしたらこの『麦』という名称は、聖書にある「一粒の麦」（一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの実を結ぶべし）に由来するのかもしれないなどと思ったりもした。墓は福島市の郊外の小高い丘にあり、そこからは懐かしい山並みが遠望された。天平の詩にあったように、「山はやはり山」のままなのであった。

さらに9月には、社研のグループ研究の仕事で大分大学に出かけ、藤本武文庫の収蔵状況を確認かたがた別府に2泊した。私は大学卒業後縁あって（財）労働科学研究所に就職し、そこで15年ほど働いてから専修大学に転職した。労研には三つの研究部門があったが、そのうちの一つが社会科学研究部であり、藤本さんは当時研究部長であったので、私にとっては直属の上司ということになる。大分大学に収蔵された邦文中心の文庫には、歴史的な価値のある文献は多くはないようにも思われたが、それでも私にとっては昔懐かしい書籍や調査報告書がたくさんあった。そんなものを手に取って眺めていると、まだ若かった頃の自分が懐かしく思い返され、ときどき仕事の手が止まった。それとともに、同行した兵頭さんと恒木さんの尽きることの無い談論風発ぶりを別府の居酒屋で眺めるともなく眺め、聞くともなく聞いていたら、何やら少しばかり若返ったような気にもなった。それが錯覚に過ぎないことは、勿論言うまでも無いことではあったのだが…。

翌10月には、これまた最後の学会になるということで、日本労働社会学会が開かれた富山大学まで出かけた。新幹線に乗れば楽なのはわかっていたが、帰路に母の生まれ育った出雲崎にも寄りたかったので、延々7時間もかかる道程をクルマで出かけた。富山から出雲崎に電車で行くには、4本もの電車に乗り換えなければならず、待ち時間も相当ありそうだったので、敢えてクルマにしたのである。年寄りの冷や水にも似た所業のような気もしたが、特段急ぐ必要も無い気儘な一人旅だったので、思ったほど苦にはならなかった。富山では昔懐かしい人に会うこともでき（もしかしたら、それが本当の目的だったような気もしないではないのだが…）、あれこれとお喋りもできて何時になく気持ちが和らいだ。思い出話などができればもっとよかったのであろうが、こちらにそんなことを望む資格があるはずもない。

学会終了後に向かった出雲崎では、いくつかの面白い出来事にも遭遇し、何とか母の実家の

跡に辿り着くことができた。今でも隣に住んでいる住人からは「もう何も無いよ」と言われたが、何かがあることを期待して行った訳では勿論ない。先祖は寺泊で北前船の廻船問屋を営んで財をなし、その後それを元手に出雲崎で地主となった。当時は「敬徳書院」の扁額を掲げた大きな屋敷だったようだが、今では廃屋どころかその痕跡すら無くなっていた。草藪に覆われた大地に夢の跡と消え去った母の実家の跡を眺めながら、遙か遠くに過ぎ去ってしまった母の人生を思った。越後出雲崎では、妻入り（建物の妻側に入り口を設ける建築様式のこと）の町並みを徘徊し、良寛記念堂や道の駅にある天領の里などを訪ねた。資料編も含めて全10冊からなる『出雲崎町史』を、ひょんなことから破格の値段で安く手に入れることができたので、わざわざクルマで出かけた甲斐があったと言うものである。

そして最後の締め括りとなったのが、今回の瀬戸内周遊の旅である。ここまでだいぶ長い前振りを書き連ねてきたのは、現在の私にとって旅とは一体何なのかを自問自答してみたかったからなのかもしれない。還暦を過ぎたあたりからは特にそうなのだが、旅に出かけては「懐かしい聲」や「遠ざかる発音」を聞き、「ささやかな記憶」を辿ろうとしているかのようである。吉行淳之介に「街角の煙草屋までの旅」と題したエッセーがあり、それがそのままエッセー集（講談社、1979年）のタイトルともなっているのだが、そこには、「以前から、自分の住んでいる都会の中を動くことを、私は旅と受け止めているところがあるようだ。事実、外国を旅行しても、住んでいる都会を動いているときも、眼のつけどころは同じような場合が多い」とある。

私などは、吉行さんのように「旅行しても私は観光ということは一切しない」などと断言できるほど、徹底した美意識と自意識を持つ人間ではないので、出かけた先々で物珍しげにあれこれ世俗的な観光もする。どこかで俗を嫌いながらも、その本人はまったくの俗人に過ぎないのであるから、当然と言えば当然のことではあるのだが（笑）。しかしながら、興味を引いたところ以外の場所では、ほとんどの場合ただぼんやりと眺めているだけなので、そうだとすると、年老いた私の場合なども、「眼のつけどころ」はどこに出かけてももはや変わりようはないのかもしれない。以下に縷々書き連ねた文章は、人文研の旅を素材としながら、私の「目のつけどころ」の在処らしきものを、日暮らしパソコンに向かってそこはかとなく書き綴ったものである。

鞆の浦と福禅寺から

今回の旅程に関しては、他の方が詳しく紹介してくれそうな気もするので、ここでは簡単に触れるだけにしたいのだが、人文研の調査旅行もなかなかハードなスケジュールである。折角

なので、出かけた機会に様々なところを回ろうという企画者の熱意が、そうさせるのだろう。だから、2泊3日という短期間の旅にも拘わらず、見学先や訪問先はぎっしりと詰まっている。久しぶりに朝早く起きて、近くの新横浜駅から新幹線に乗った私だが、同じ学部の鈴木さんや堀江さんと久しぶりの四方山話に打ち興じているうちに、3時間程で福山に着いた。何だかあつけない感じである。

この日に福山から目指したのは鞆の浦と尾道である。鞆の浦近くのホテルで海を眺めながらの昼食となったが、私のようながさつな人間にはもったいないほどの立派な料理が並んだ。瀬戸内は鯛料理で知られているらしいが、私はそんなことも知らなかった。そのホテルで、「ふくやま文学館」主催による企画展「生誕120年 井伏鱒二の青春」と題したパンフレットを手にした。福山を代表する作家と言うと、やはり井伏ということになるのだろう（県は異なるが、福山の隣にある笠岡は、2年前に退職された町田俊彦さんが好んでいた木山捷平の出身地である）。シンポジウムのテーマは、「未公開書簡群から浮かぶ井伏鱒二の青春像－自伝・絵画・恋」とあった。ちょっと顔を覗かせてみたくなるような企画である。

少し移動するともう鞆の浦である。入り江の全体を「浦」と言い、港は「津」と称するらしいが、どうもそれほど厳密には区別されていないようなので、鞆の浦は鞆の津と言われることもある。先の井伏には、『鞆ノ津茶会記』（福武書店、1986年）という作品があり、そこには「鞆ノ津の福禅寺客殿に於て、この寺の和尚の御手前で茶の湯の会を設けてもらった。（中略）今年も福禅寺で茶会をするつもりでみたところ、今年四月、思はぬ火事で福禅寺が丸焼けになったので、鞆ノ津の安国寺の茶席で催されることになった。福禅寺は空也上人の開基で村上天皇の御願所とも云はれ、深い由緒を語られてみた」とある。

ここに登場する福禅寺については後に触れることにして、まずは鞆の浦から話を進めよう。井伏のエッセー「鞆ノ津所見」には、「ここは一本みちの街で、両側の家はたいてい鍛冶屋である。錨を製造してある」とある。このエッセーは1931年の作なので、今はもう鍛冶屋などは一軒も残っていないのだろう。われわれは、古い町並みに点在する商家や保命酒を作っている酒屋などを覗きながら、海辺に出た。旅先ではこうした古い場所を取り留めもなく徘徊するのが好きである。何とも懐かしい場所に辿り着いたかのようで、心の強ばりが和らぎ気持ちが安らぐからである。

鞆の浦は、昔から潮待ちの港として知られていたらしい。瀬戸内海の海流は、満潮時には豊後水道や紀伊水道から流れ込んできて、この瀬戸内海のほぼ中央に位置する鞆の浦の沖でぶつかり、逆に干潮時には鞆の浦の沖を境にして東西に分かれて流れ出して行くのだと言う。つまり、鞆の浦を境にして潮の流れが逆転するとのことである。昔は「地乗り」と呼ばれた陸地を目印とした沿岸航海が主流だったので、瀬戸内海を横断するには、鞆の浦で潮目が変わるのを

待たなければならなかったらしい。こうした地理的な条件から、潮待ちの港になったのだと言う。ここでは、江戸時代の港湾施設の名残りだと言う常夜燈と雁木を見た。常夜燈は観光案内の写真などでよく紹介されているので、多くの人を知っていることだろう。もう少し暖かくなって、春の宵にでもこんなところをほろ酔い気分で散策し、瀬戸内の柔らかな海風などに吹かれていたら、すこぶる気分もよかろうなどと思ったりもした。

面白かったのは雁木の方である。雁木と言うと、東北生まれの私などは雪国に見られるものしか思い浮かばない。通りに面した店の軒から路上に長いひさしを張り出し、その下を通路としているものである。だが辞書によると、雁木にはもう一つの意味があった。そこには、「道から川原などにおりるための、棒などを埋めて作った階段。また、船着き場の階段。棧橋の階段」などと記されている。その階段は今ではもう石段に変わってはいたが、それでもどこか風情が感じられた。街全体に昔の面影が残されており、往時の雰囲気が漂っているからなのかもしれない。

その後、鞆の浦から「歴史民俗資料館」と件の福禅寺に向かったのであるが、ガイドさんの説明によると、急な坂の途中には昔遊郭があったのだと言う。ちょっと通っただけでは気が付かない。しかし、潮待ちの港として栄えたのであれば、船乗りを相手にした遊郭は付き物だったであろう。詳しく聞きたかったが、年寄りの癖に恥ずかしくてその勇気が出ない。仕方が無いから帰宅してネットで検索してみたら、世の中には遊郭好きの人もいるらしく(笑)、写真入りで詳しく紹介されていた。その起源は相当に古く、14世紀初頭の「とはずがたり」にも鞆の遊女の話が出てくるのだと言う。

「歴史民俗資料館」で手にした冊子によると、鞆の津は西廻り航路の北前船も出入りした港として賑わったようだ。北前船の寄港地と言うと、私などは日本海側の港しか思い浮かばなかったが、鞆の津もそうだったのである。次に向かったのは福禅寺であるが、ここも今回行ってみたい場所のひとつだった。冒頭でも触れたように、2017年の春に社研の調査旅行で釜山、対馬、太宰府と回ってきたのだが、この調査旅行の柱のひとつに、朝鮮通信使の事蹟が位置付けられていた。

私も少しばかり日朝関係史には興味があったので、出かける間に朝鮮通信使についてもわか勉強を試みた。それで知ったのだが、鞆の浦はこの朝鮮通信使とも関係の深い場所なのである。社研の調査旅行の際にガイド役を引き受けてくれたコリア語の非常勤講師の魏さんとは、その縁で大分親しくなったので、その彼に、今度鞆の浦の福禅寺に出かけることを話したら、「重要な場所なのでよく見てきて欲しい」と言われた。彼は、全国に散らばる通信使と縁のある場所を機会があるたびに回っているとのことで、わざわざ私にアドバイスしてくれたという訳である。そんなこともあって注目していた。

朝鮮通信使とは、朝鮮王朝が日本に送った外交使節団のことであり、江戸時代の約 200 年間に計 12 回派遣されている。その規模は、正使を筆頭に総勢約 500 人にも上る大使節団であり、それに対馬藩士数百名も随行したと言うのだから、沿道の人々にとってはたいへん物珍しい行列だったに違いない。しかも、一行は幕府が招待した国賓だったので、その扱いは丁重を極めたい。『朝鮮通信使』(岩波新書、2007 年)の著作がある仲尾宏らが、2016 年暮れから 17 年春にかけて「朝鮮通信使の道」と題した記事を『京都新聞』に 20 回にわたって連載しているが(この記事のコピーも魏さんからもらった)、それによると、通信使一行中の三使臣(正使、副使、従事官)の宿舎には、寄港池の名だたる寺院が選ばれたようで、たとえば、山口の赤間関では阿弥陀寺、広島の本郷の浦では福禅寺、岡山の牛窓では本蓮寺などであったと言う。なかでも福禅寺は、1711 年に従事官が海に面した客殿からの眺望を「日東第一形勝」(朝鮮より東で一番美しい景勝地であるとの意)と賞賛したり、1748 年には正使がこの客殿を対潮楼と名付けたことでも知られている。

福禅寺の案内人も、対潮楼からの眺めを少しばかり(いや、かなりだったかもしれない一笑)自慢げで紹介してくれた。本堂に隣接する対潮楼に座ると、眼前に湖と見紛うような海が広がり、緑に覆われた仙酔島(仙人も酔ってしまうほど美しいことから命名されたと言う)と岩肌が目立つ弁天島が一望され、さながら一幅の絵を見ているかのようである。案内人の話によれば、夜ここに月がかかればその美しさは格別であるとのことだった。本郷の浦の月については、後に触れる志賀直哉の『暗夜行路』にも出てくるから、昔から見事なことで知られていたであろう。

「日東第一形勝」と褒め称えたい気持ちはわからないではないが、いささか狷介な私には、どことなく「俗」の気配が漂っているようにも感じられた。あまりにも出来過ぎているが故に破綻の無い眺望がそう思わせたのかもしれないし、あるいはまた、褒めそやされていることに対する軽い反発がそう感じさせたのかもしれない。今日の日韓関係の悪化を憂慮している私としては、「形勝」だけではなく、朝鮮通信使を迎えた対馬藩の人士雨森芳洲が担おうとした、「誠信交隣」の「精神」についても強調して欲しかったのではあるが…。朝鮮通信使に関する文献や絵図が、2017 年にユネスコの「世界の記憶」(世界記憶遺産)に登録されたが、その背景には「誠信交隣」の「精神」に対する高い評価があったに違いないだろう。

ところで、旅の途中で手に入れた『瀬戸内万葉紀行』には、家持の父である大伴旅人の歌「吾妹子が 見し本郷の浦の むろの木は 常世にあれど 見し人そなき」(わが愛しい妻が往路に見た本郷の浦のむろの木は、長く命を保っているのに、それを見た妻はもういないの意)が紹介されていた。旅人は本郷の浦で妻との別れを偲んだ歌を三首詠んでいるとのことだが、本郷の浦ではこうしたものをこそもっと味わってみるべきだったかもしれない。この歌碑は福禅寺の対潮楼

の袂にあり、海に向かって立っていた。ガイドさんが歩きながら紹介してくれたような気もしたが、私はほとんど気にもとめずに通り過ぎてしまった。旅人の歌三首を含めて、万葉集には軻の浦を詠んだ歌が八首残されているということだから、そんなところからも相当に古い土地柄だと言うことがわかる。古さが醸し出すノスタルジックな雰囲気が、直ぐに消滅していく目新しさに飽きた観光客を惹き付けているのだろう。古いものが持つ普遍性とでも言おうか。

尾道と千光寺—直哉と芙美子—

福禅寺を後にしたわれわれは尾道に向かい、ロープウェイで千光寺公園に登った。瀬戸内が一望できる見晴らしのいい公園だった。冬なので花を見ることはなかったが、暖くなれば様々な花々が咲き誇るのだと言う。山頂からは「文学のこみち」を歩いて降りたが、冬の午後かさかさとした土を踏んでいたためなのか、あるいはまた、ゴツゴツした岩が目立った道のためなのか、「文学のこみち」と言う表現から連想されるような柔らかな雰囲気は余り無い。千光寺の本堂前で手に入れた『千光寺と文学のこみち』には、こみちの至る所で目にした歌碑や句碑、文学碑が紹介してあったが、尾道に縁のある人々がいささか雑然と紹介してあるような気もして、ここにも「俗」を感じないではなかった。

私などがまったく知らなかった人物で目に止まったのは、江見水蔭（えみすいゐん、1869年に岡山に生まれた明治の小説家）の句碑である。そこには「覚えきれぬ 島々の名や 夏がすみ」とあった。もう一ついい句だと思ったのは、現代の俳人として名高い鷹羽狩行（たかはしゅぎょう）の句、「海からの風 山からの風薫る」である。どちらもともに単純かつ素朴な句だからなのだろうか、「俗」を感じさせることのない、何とも爽やかで清々しい印象ばかりが残った。亡くなった多辺田さんなら、一体どんな句を詠んだであろうか。

私のような年寄りにとっては、尾道と言えば志賀直哉であり、林芙美子であり、小津安二郎である。志賀直哉の碑には『暗夜行路』の一節が刻まれていた。『暗夜行路』は、高校二年の時の夏休みの課題図書として読まれたような記憶が、ぼんやりとだがある。その時に、読んだ証拠として主人公の時任謙作の名前ぐらいは覚え、彼の人生に対する苦悩のほどはわかったが、余りにも幼ないまま平凡な高校生活を過ごしていた私には、あとは何も理解できなかった。今から考えると、「高等遊民」である主人公が、出生の秘密や妻の不義に懊悩し、自己と外界との葛藤に苛立ちながらも、やがて大自然の懷に包まれるなかで自己の再生を果たす物語など、私のような人間にわからなくて当然であったろう。奥手の私は、数年前に精読する機会があって、その時にようやく『暗夜行路』の面白さを実感できた。読みかけの途中で本を閉じるのが惜しくなったからである。

その碑にあるのは次のような一節である。「六時になると上の千光寺で刻の鐘をつく。ごーんとなると直ぐごーんと反響が一つ、又一つ、又一つ、それが遠くから帰って来る。其頃から、昼間は向い島の山と山との間に一寸頭を見せている百貫島の燈台が光り出す。それはピカリと光って又消える。造船所の銅を溶かしたような火が水に映り出す」。千光寺の鐘の音は、尾道で暮らす人々にとって特別なものがあるのだろう。そんなことも窺わせるような碑文である。現実の碑文には句読点は無い。パンフレットの表記にはわずかな誤りがあったが、それはご愛敬と言うものである。

このパンフレットによると、碑文は直哉の懇望によって画家の小林和作が筆を執ったとあった。聞き覚えのある名前だった。大分前になるが、東横線の日吉駅前にある貸本屋兼古本屋に入った際に、彼の画集を買ったことがあったからである。好きな画家中川一政に似た筆致のようにも思われて、ついつい購入したのである。彼は戦前尾道に移り住み、以後亡くなるまで40年間にわたって尾道を拠点に絵を描き続けたと言う。美しい構図を求めて全国を歩き回ったようで、尾道を描いた絵は大部の画集の中に一枚しかない。尾道の名誉市民にもなっているのだから、この地とはきわめて縁の深い人物だったのである。小林の好きな言葉だと言う「天地豊麗」をタイトルにしたこの画集（求龍堂、1974年）には、彼自身の解説が載っている。生まれのよかった彼だが（あるいは、そうだったからなのか）、そこには「世の金持ち面をする人や貧民を見下す人達は大キライ」であり、「民衆画家」の一人でありたいと書かれていた。

この小林は、手元にあった『TRAVEL MATE 日本の旅情』シリーズの一冊（国際情報社、1970年）に「古き美しきまち」と題したエッセーを書いていた。それによれば、尾道は江戸時代には「瀬戸内海では十指のうちへ数えられるほどの賑やかな要港」として栄えたので、当時は「中国筋の遊里の番付の筆頭であったほど賑わった」ようであるし、経済的に豊かであった証拠に、「昔は寺院が八十一カ寺もあり、今日でも二十四カ寺を数えるほどの全くの寺の町」であり、「安芸の宮島とならんで中国路きっての文化財都市」なのだと言う。寺が多い町だと言うことは知っていたが、その背景には港町としての繁栄と富の蓄積があった訳である。

ところで、直哉が東京から尾道にやって来て、千光寺の中腹にある三軒からなる棟割長屋の一軒を寓居としたのは、29歳になった1912年末のことである。ここに翌年4月まで住み込み、後の『暗夜行路』につながる草稿を執筆したと言う。『暗夜行路』によれば、主人公時任謙作は自伝的な小説を書くために、「山陽道の何処か、海に面した処で、簡単な自炊生活をする」といった計画を立て、それを兄に相談すると、「尾の道へ行くといい。尾の道はいい処だよ」と教えてもらう。尾道に着いた翌朝謙作は千光寺に向かうのだが、その途中の崖の上に見つけたのがこの棟割長屋である。尾道の人間も、長屋からの景色もだいぶ気に入った様子が描かれている。

当時の棟割長屋は、『暗夜行路』によればかなりガタビシしていたようだが、その長屋が修復

されて志賀直哉旧居として残されている。わずか半年ばかり住んだだけの長屋だが、名作に登場する寓居だと言うことで、保存されているのである。この旧居も文学記念室も当日は運悪く休館で中に入ることはできなかったが、外から眺めただけでも、直哉の佇まいを感じ取ることができた。以前私は学会のついでに、奈良の高畑にある復元された直哉の旧居にまで足を伸ばしたことがある。いかにも端正で静謐な住まいであったが、その時と似たような雰囲気を感じさせる旧居跡だった。

井伏には、「志賀直哉と尾道」と題したエッセーがある。1935年に書かれたこのエッセーによると、彼は修復前のあばら屋となっていた長屋を訪ね、関係者と会って話を聞いている。同じ長屋に住んでいた田組アイ婆さんは直哉を尊敬していたらしいが、近所の人たちは彼を要注意人物だと思っていたようだ。「朝は遅くまで寝てみて、夜になると何やら机の前でつらそうに考え込み、時によっては、たとひ夜中でも不意に東京に行つて来ると婆さんに言い残して街におりて行く」のだから、そう見えたのも当然だろう。

その後しばらく経って、直哉から『暗夜行路』がアイ婆さんに送られてくるのだが、字が読めないので仲良しの村上と言うおばさんに読んでもらうことになる。そのうち、雨の降った日や仕事が暇な時には、近所の長屋に住むおかみさんたちが、アイ婆さんの家に集まって村上のおばさんの読む『暗夜行路』を聴いたらしい。就中、尾道を描いたところなどは繰り返して朗読し、おかみさん達は声をそろえて誦読したと言う。井伏は書いている、「『暗夜行路』の愛読者は全国に何百万人あるかしのれないが、こんなにうっとりこの小説を読み込んだものは、尾道の寶土寺裏に住む長屋のおかみさん達ではなかったろうか」と。文学にとって何と幸せな時代であったことだろう。

次に取り上げたいのは、志賀直哉や小林和作とはあまりにも対照的な世界から、逆境に負けることなく文壇に這い上がってきた林芙美子である。「文学のこみち」にあった彼女の碑文は、『放浪記』の二部から引かれていた。「海が見えた。海が見える。五年振りに見る、尾道の海はなつかしい。汽車が尾道の海へさしかかると、煤けた小さい町の屋根が提灯のように拡がって来る。赤い千光寺の塔が見える。山は爽やかな若葉だ。緑色の海、向うにドックの赤い船が、帆柱を空に突きさしている。私は涙があふれてゐた」。こちらは、碑文もパンフレットもともに原文とわずかに読点の違いがある。この碑文の筆者は、尋常小学校の恩師であった小林正雄と言う人物である。

『放浪記』の三部にも尾道は登場する。あまりに暑いので母と夜更けに浜に出た芙美子は、腰巻きひとつで海に入って泳ぐのである。「暗い水の上に、小舟が蚊帳を吊って、ランプをとぼしているのが如何にも涼しそうだ。雨上がりのせい、海辺はひっそりしている。千光寺の灯が、山の上で木立の中にちらちらゆれて光っている」とある。旅回りの行商人だった両親の元

で育ったこともあって、芙美子は自分ではふるさとを持たないと言っていたようだが、そんな彼女がふるさとの近い感情を抱いていたのは高等女学校を卒業するまで住んでいた尾道だったに違いない。そのことは、先の碑文に刻まれた心に滲みる美しい文章からもわかるだろう。

旺文社文庫の『風琴と魚の町』（1976年）にはかなり詳細な年譜が付けられているが、それによると、一家三人は1916年に尾道に移り、これまでの木賃宿を追って歩いた放浪生活から定着した生活となり、尾道で7年もの歳月を過ごすことになる。彼女の処女的な短編である「風琴と魚の町」（1931年）には、当時の尾道での彼女の暮らしの一端が描かれている。尋常小学校に編入した彼女は学校でも孤独であったが、担任の小林正雄は芙美子の境遇とそれに耐え忍んできた純情可憐さを哀れみ、さらには彼女の文学的な才能をも認めて、長らく彼女の庇護者であり保護者となったと言う。小学校を卒業した芙美子は、小林の強い勧めと援助で、高等女学校に進むことになる。芙美子の家の経済状態からすれば、とても思いもよらないことだったと書かれている。昔そんな教師がいたのである。先の年譜には、小林は「芙美子に単なる教電子以上の愛情を注いでいたとも考えられる」と記されていた。

尾道高等女学校時代の教師に関しては、武藤康史編『林芙美子随筆集』（岩波文庫、2003年）に収録されている「私の先生」と「文学的自叙伝」と題したエッセーが興味深い。ここには当時の教師が何人か登場する。「社会の暗黒面を知るような本を読んではいけない」と言う校長や、この校長におもねって「小説を読むふとどきな生徒がいることは困ったことです」と訓示するような若い教師もいた。他方で森と言う国語を教えてくれた担任の教師は、芙美子らをのびのびと育てようとする。自由にもものを書かせ、ときどき生徒の作文を読んで批評を加えたと言う。芙美子ともう一人の少女の作文は、いつも読まれたらしい。さらには、外国の詩人たちの詩を読んで聞かせてくれたようだが、芙美子は心温かになりノートも採らずに「眼をつぶってその詩にききほれた」とある。彼は頭が禿げ上がっていたので、クラスでも「おぼろ月夜」とあだ名されていたが、大変無口で叱ったことがなかったと書かれている。

商業都市であった尾道では、課外で珠算をやらなければならなかったようだが、芙美子同様森先生も珠算が嫌いだったようだ。文学を好んだ二人には、肌が合わなかったのであろう。彼女が二年になって、この森先生は他の中学に転任することになるのだが、目立たない教師だったので誰も悲しまず、「先生の家族を停車場へおくって行ったのは生徒で私ひとりであった」と書かれている。芙美子はそれから森先生の恩に報いるために、先生の子供のために「母にねだっては時々名物の飴玉を少しばかり送った」のだった。苦勞して生きてきた芙美子の優しさが偲ばれるエピソードである。

私も大学の教員となり、そしてこの3月に32年間の教員生活を終えて定年退職した。その所為なのか、芙美子が描くような師弟関係に深い郷愁を感じるのである。壺井栄が「二十四の瞳」

(原作は1952年、木下恵介による映画化は1954年)で描いた、大石先生と生徒たちにも通ずる感覚である。甘いと言われれば確かに甘いのではあろうが、この年になると、こうした感受性を共有し得ない人と言葉を交わすのが面倒になってくる。だから年寄りは何介なのである(笑)。私自身小学校から大学まで、生徒や学生として様々な教師と触れ合ってきたし、また逆に、専修大学の教員になってからは、様々な学生と触れ合ってきた。先のような思いを強く抱くのも、そこに育まれた関係がどのようなものであったのか、あるいはありえたのかを、振り返ろうとしているからなのだろう。

「東京物語」断想

尾道と言えば、小津安二郎についても触れておかなければならないだろう。誰もが一度は見ているに違いない彼の不朽の名作「東京物語」(1953年)の、冒頭と結末の舞台として登場するのが尾道である。私はそれほど多くの映画を観てきた訳でもないので、映画ファンや映画マニアなどと自称できるような人間だとは思っていない。ファンやマニアと言うなら、同行した所長の伊吹さんや根岸さんの方がずっと相応しいだろう。根岸さんは、大林宣彦の尾道三部作について書きたいと言っていたが、私などは三部作はもちろんのこと新三部作のどのひとつも観ていない。

しかしながら、映画を観ることは好きだし、映画に関する本を読むことも好きである。文学作品と同様に、映画のなかに人生を見たり、映画を通じて人生を語りたくなるような、何とも古いタイプの人間だからである。言い換えれば、生きる構えといったものを映画にも求めているのである。そんなこともあって、ゼミナールでは毎年夏合宿の前に名画を二、三本指定しておいて、学生たちにそれを見て合宿に参加するように求めてきた。そして合宿では、見てきた映画についてかれらといろいろと語り合ってきたのである。そこで指定した映画は、普段学生たちが目にしないであろう古いものにすることが多かったが、そのなかに「東京物語」を入れたこともあった。今では懐かしい思い出である。

こんな話を書いているうちに記憶が蘇ったのだが、大分昔に伊吹さんから「お薦めの一本」について語ってくれと頼まれたことがあった。彼がそんな企画を立て、何人かの教員に推薦する映画の話させたのではなかったかと思う。昼休みに少人数の学生を前に話をした記憶がある。その時に取り上げたのは、たしか「十二人の怒れる男」(監督シドニー・ルメット、1957年)だったはずである。「また逢う日まで」や「にぎりえ」で知られる映画監督今井正の孫だと言う学生が、ゼミに参加したこともあったし、「社会教養特別講座」のゲストの一人として、山田洋次さんに専修大学に来てもらったこともあった。

余りにも著名な彼に、専修大学に来てもらうのはとても無理だろうとは思ったが、ダメ元でラブレターを書いて口説いてみたのである。案に相違して、山田さんはおおよそ次のようなことを言って、引き受けてくれた。「人を集めるためだけの講演依頼はいつもお断りしていますが、若者を育てている大学からの依頼であれば別です。なんとか都合をつけて行きましょう」。彼のその言葉に、私がいたく感激したことは言うまでもない。今から思うとずいぶんと大それた依頼をしたものである。当時は若かったから、そんなことが平気でできたのだろう。

小津安二郎についてはもちろんのこと、「東京物語」についても数多くの著作があり、私などがあれこれ語る必要などは何もない。ここで書きたいのは、なぜ尾道が舞台として選ばれたのかということだけである。人物の造型にも、様々な家具や調度品にも、切り取られた風景にも、カメラのアングルにも、こだわりなどと言った表現では表しきれない程の執着を示してきた彼のことだから、尾道を舞台とするに当たっても、当然周到な意図が働いていたはずである。

しばらく前に貴田庄の『小津安二郎文壇交遊録』（中公新書、2006年）を読んでいたら、そこに「志賀直哉、そして『暗夜行路』」という章があり、読むと小津が志賀直哉が好きであり、大変尊敬していたとあった。戦争中に書かれた小津日記によると、「激しいものに甚だうたれた。これハ何年にもないことだった。誠に感ず」と記されているとのことである。戦地という特殊な状況で読んだとはいえ、その感動が並大抵のものではなかったことがよくわかる。著者の貴田は、「小津はその60年の人生において、『暗夜行路』ほど感動した小説はなかったようだ」と書いているが、その後の二人の親密な交友を知ると、きっとそうだったに違いなからう。

「東京物語」の主人公は、尾道に住む老夫婦であるが、尾道が映画の重要な舞台に選ばれた背景には、志賀直哉の存在があったのである。先にも触れたように、志賀直哉は千光寺に通ずる道の崖上にあった棟割長屋のひとつを寓居にしたのであるが、小津らはそれを頼りにしたかのように、近辺の家々を入念に見て回ったのだと言う。こうした事実を私はまったく知らないでいたが、それを知ると、「小津は『東京物語』において志賀直哉や『暗夜行路』を十分に意識して、尾道を舞台のひとつに選んだ」ことがわかるだろう。他にもあれこれ好都合な事情があったとも貴田は書いているのだが、私にはそれらは付随的な要因のようにも思われた。

田中眞澄の『小津安二郎周游』（文藝春秋、2003年）にも、次のような文章がある。「志賀直哉は小津にとって生涯を通じて最高の畏敬の対象だった」し、しかも彼は「現実の志賀に接して、作品以上にその人柄に魅せられた」と言う。それ故に、家族の崩壊という「主題の趣旨だけを問題とすれば、そこは東京以外であれば論理的にはどこでもよいはずである。どこでもよいそこに尾道が選択されたに就いては、やはり志賀直哉への傾倒の記念と考えざるを得ない」のだと。しかも、「小津はこの時期、志賀との直接的な交渉が最も頻繁だった」と言うのであるから、尚更である。もっとも、「尾道という設定がこの作品の要求に適していたことも確かだっ

た」ようで、映画が封切られた1953年当時の東京、尾道間は列車で15時間ほどかかったらしく（現在では東京、新尾道間は新幹線で4時間ほどである）、上京や帰郷が容易ではなかったのも、帰途に老妻が体調を崩す程度の距離と時間だったと書かれている。

田中のこの著作は、小津安二郎とその周辺の消息を微に入り細にわたって渉猟した大変ユニークな本で、ここまで調べ上げる人がいるのかと驚かされる。小津には偏執的などころがあったことは先にも触れたが、その性格が田中にも乗り移ったかのようである。偏執的と言えば、先の貴田庄にもその匂いはあるが、齋藤慎爾編の『キネマの文学誌』（深夜叢書社、2006年）なども同類であろう。映画マニアにはそんな人物が多いような気もするが、そんなふうにするのは私だけなのであろうか。私自身は、こだわりをこだわりとしてそのまま表出することに恥ずかしさを感じないタイプ人間なので、そのことだけをもって高く評価している訳では勿論ないのだが…。

「編集余滴」と題した齋藤のあとがきを読むと、「本書はわが国に映画が入ってきた明治中葉から平成までのおよそ百年の文学史、映画史を縦貫させた初の〈キネマの文学誌〉である。作家による映画評論、随筆ばかりでなく、日記、対談、インタビュー記事も収載した。いわば明治・大正・昭和・平成四代の〈近現代日本の精神史〉もしくは〈近現代日本の大衆文化史〉とも呼べるものである」と記されている。作家による映画評の集大成のような本なので、当然ながら志賀直哉のものも含まれており、その中には「東京物語」についてのごく短い推薦文も収録されている。「嘘がない、いい小説を読んだあとのやうな感銘を受けた。僕が見た小津君の作品の中では一番いいと思ふ」との評価である。

母親の死と前後して、仕事と暮らしに追われている息子や娘たちがあつたふたと集まってくる。そんな時に、戦死した次男の嫁役の原節子が、夜明けを見に庭先に出た老父役の笠笠衆を迎えに行くのである。その二人を撮った、短い会話であるが故に余りにももの悲しいシーンは、千光寺の東に位置し山陽線に沿って建つ浄土寺で撮られている。今回の旅では、浄土寺までは足を伸ばせなかったので、少しばかり心残りではあった。しかしながら、たとえ行ったとしても、当時の面影などはとうに残ってはいないような気もしないではなかったが…。フィルムアートの『小津安二郎を読む』の表紙には、「古きものの美しい復権 永遠の静止 すべては小津の眼差しに守られて ただ画面のなかに生きつづける 沈黙と抑制 ノスタルジーと余韻 失われたものが美しくよみがえる」とあったが、私のような古いタイプの人間が期待するものなどは、「抑制」された「静止」のなかに「余韻」を漂わせながら、「ただ画面のなかに生きつづけ」ているだけなのであろう。

こんなふうを書いてきて、宿泊先のホテルで手に入れた『尾道の本』（Ver.2）を眺めていたら、そこには次のような話が紹介されていた。今では尾道は「映画のまち」と呼ばれたり、そ

れを町おこしの柱の一つにしているようなのだが、映画の黄金期であった昭和30年代には市内に20館ほどあった映画館が、2001年にはとうとうゼロになっただろう。そのことを残念に思っただけでなく、2,700万円の募金を市民から集めて、2008年に念願の映画館「シネマ尾道」の開館にこぎつけたのだと言う。

そしてその「シネマ尾道」では、毎年「東京物語」を上映しているとのことである。先に、志賀直哉の寓居近くのおかみさんたちが『暗夜行路』を傾聴した話を紹介したが、「東京物語」にもそれと似たような話があったのである。この雑誌の編集部によると、『東京物語』のセリフの中で『尾道』が発せられるのは、合計10回だと言う。そこには、9ポイントあるロケ地の詳細とその地図が紹介されていたが、こんなことまで調べあげて雑誌で紹介しているのは、地元の人々が尾道を愛し、そしてまた「東京物語」の舞台となったことを今でも誇らしく思っているからに違いない。

この映画の主人公は、尾道に住む老夫婦である平山周吉（70歳）ととみ（67歳）である。小津自身が語っているように、「永遠に通じるものこそ常に新しい」からでもあろうし、それに加えて、私も周吉と同じ年齢となったからでもあるのだろうが、今から60年以上も前の老夫婦の会話にも拘わらず、妙な親近感を覚えて何とも切ない気持ちになるのである。例えば次のようなやりとりを見てみよう。

とみ「一でも、思いがけのう大阪へもおりて、敬三にも会へたし、わづか10日ほどの間に子供らみんなに会へて」

周吉「ウム」

とみ「孫らも大きくなつとつて…」

周吉「ウム。一よう昔から、子供より孫の方が可愛い云ふけえど、お前、どうぢやつた？」

とみ「お父さんは？」

周吉「やつぱり子供のほうがえゝのう」

とみ「さうですなア」

周吉「でも、子供も大きくなると、変わるもんぢやのう。志げも子供の時分はもつと優しい子ぢやつたぢやにやアか」

とみ「さうでしたなア」

周吉「女の子ア嫁にやつたらおしまひぢやア」

とみ「幸一もかわりやんしたよ。あの子ももつと優しい子でしたがのう…」

周吉「なかなか親の思ふやうにアいかんもんじや…一欲ウ云や切りアにやアが、まアえゝ方ぢやよ」

とみ「え、方ですとも。よつぼどえ、方でさ。わたしらア幸せでさ」

周吉「さうぢやのう…。まア幸せな方ぢやのう」

とみ「さうでさア。幸せな方でさア…」

亡くなった父や母も、もしかしたら周吉ととみのような会話を交わしたのであろうか。言葉としては口の端に上らなかったかもしれないが、心の中では似たような感懐を抱いていたのであろうか。もはや確かめる術も無いのだが、十分にあり得たようにも思われる。それどころか、周吉と同じ年齢に達した私などにも、こうした感懐の兆しは現れているし、これから似たような会話を交わすことになるのかもしれない。老夫婦は優しかった頃の子供のことを思い出すのであるが、それによって「失われたものが美しくよみがえる」ことになったに違いない。こんなふうにと書くと、孫が可愛くないのかとか親子関係に何か問題でもあるか、などと憶測されそうであるが、現実の世界における具体的な問題の有無などには拘わらず、親と子の関係はこうした形で緩やかに、そして確実に崩れていくものなのではなかろうか。老いるということは、こうした諦念を胸の奥深くに仕舞い込んでいく営みでもあるのだろう。

「坂の上の雲ミュージアム」にて

話があちこちに飛んでしまっていて、何とも纏まりの無い文章になってしまっているのだから、再度旅の話に戻ろう。尾道で一泊した私たちは、翌日しまなみ街道を渡って四国松山に向かった。夕刻に出かけたのは、ホテルの真向かいにある「坂の上の雲ミュージアム」である。作者である司馬遼太郎の記念館（この名称の記念館は、彼の生まれ故郷である東大阪市にある）とでも言うのであれば、それはそれでわからなくもないが、こうした名称では松山に建てることはできないし、その意味も無い。松山に建てるというのであれば、松山出身の秋山好古、真之兄弟や正岡子規が登場する「坂の上の雲ミュージアム」と命名するしかない。世の中にあまねく知られた作品とは言え、彼の一作の名を冠したミュージアムと言うのであるから、一体どのようなものなのか興味が沸いた。

建物は安藤忠雄の設計によるとのこと、外観もそうだが内部もなかなか斬新な作りである。贅沢な空間のなかに身を置いてゆったりとした気分で展示物を見て回った。傍迷惑も顧みずにその時の正直な気持ちを吐露させてもらえば、立派な建物とは対照的に、展示されているものが余りにも貧弱であった、とすることに尽きる。内容が余りにも乏しいのである。一通り見ては回ったものの、予定の時間が余ってしまったので売店で資料でも探そうかと思っただけだったが、買いたいものも特に無い。何やら壮大な空洞の中にいるような虚しささえ感じな

いではなかった。

この『坂の上の雲』は、1968年から1972年にかけて『産経新聞』夕刊紙上で連載された作品である。連載が開始された1968年は、政府主催の「明治100年記念式典」が大々的に挙行された年でもある。特段の繋がりはないのであろうが、何やら因縁めいたものを感じないでもない。1972年に単行本化されてからこれまでに発行された部数は、累計2,000万部を超えたとも言われており、司馬作品の中では「竜馬がゆく」に次ぐ大ベストセラーである。近年は100万部を超えれば立派なベストセラーのようであるから、2,000万部ともなればもはや異様なまでの売れ行きと言う他はない。何故にそれほど数の読者を獲得し得たのであろうか。やはりそこが気になる。勿論ながら、徹底した資料の収集と「歴史探偵」と呼ばれる程の微に入り細にわたった検証にもとづいて（こうした評価自体が、この「小説」で描かれた世界をすべて「事実」として受け止めさせる誘因になっており、そこに落とし穴もある訳なのだが…）、物語を紡ぎ上げていく作者自身の力量も、それはそれで並大抵のものではなかろう。そのことを否定するつもりはないし、またその必要も無い。

だが果たしてそれだけで、先のような売れ行きを説明できるものであろうか。やはり難しかろう。膨大な時間をかけ丹念な取材にもとづいて描かれた歴史小説が、同じように売れる訳ではないからである。勝手に推測するに、描かれた世界が政治家や経営者まで含んだ多くの国民の心性に、強く共鳴したからではないのか。もっと正確に表現すれば、国民の心性に共鳴するような内容の物語を、作者自身が意図して描いたからではないのか。どうもそんな気がするのである。アジア・太平洋戦争での敗北と無条件降伏によって、戦前に作り上げられた日本人としての自信や誇りやアイデンティティーが一挙に崩壊した訳だが、そうした崩壊感覚は、戦後復興と高度成長による「経済大国」の達成によっても癒やされることはなかった。『坂の上の雲』は、それを癒やすものとして登場したようにも思われる。

ところで、先のような崩壊感覚が何故いつまでも癒やされなかったのであろうか。『永続敗戦論』（太田出版、2013年）の著者である白井聡の指摘を踏まえてみると、「経済大国」なるものは、敗戦の帰結としての政治・経済・軍事のすべてにおける対米従属構造が永続化されることによってもたらされたものであり、そのことが、敗戦そのものを巧みに隠蔽し否認するという多くの日本人の歴史認識や歴史意識の構造を持續させてきたからであろう。しかしながら、敗戦を糊塗し隠蔽し否認している限り、表面的には崩壊感覚は隠蔽されたかのように見えながらも、替わりの「物語」が無い限り、いつまでも現実を無視したままであるという胡散臭さを払拭することはできない。

もう少しわかりやすく言えば、「経済大国」なるものは戦後の精神的な空白を埋め合わせるかの如くにして達成されたものに過ぎず、根無し草の「豊かさ」に対する漠然とした不安を伴わ

ざるを得なかったのである。「経済大国」の達成という「成功」が、あらためて精神的な空白の持続という「失敗」を国民の間に強く意識させたと言い換えることもできるかもしれない。広く社会に定着したと思われていた戦後民主主義も、その底流においては依然として先のような崩壊感覚を抱え込んでいたのであろう。『坂の上の雲』の連載が始まった1968年という年は、若者の「叛乱」の爆発的な広がりということでも注目される年であるが、精神的な空白という感覚は、そこにも通底していたようにも思われる。戦後民主主義を「虚妄」として足蹴にする言説と、凄惨な「内ゲバ」にまで至る暴力主義的な行動様式に、精神的な空白に対する苛立ちを見て取ることも可能であろう。

そうした時代に、『坂の上の雲』という近代日本の黎明期の青春の輝きを描いた物語、そして日清・日露戦争での勝利を描いた物語が投じられたのである。精神的な空白を埋め合わせるうえで、格好の妙薬となったのではあるまいか。言ってみれば、国民の多くが待ち焦がれていた強精剤や回春剤のようなものであろう。そして、作者自身もそのことを十分に自覚して執筆していたようにも思われるのである。日清戦争から日露戦争にかけての日本のように「奇跡を演じた民族」はまず類がないとか、日本海海戦での勝利を「人類がなしえたともおえないほどの記録的勝利」であったなどと書いていることから、明らかであろう。こうした、作家の文章と言うには何とも無防備かつ無遠慮な（つまり、あられもないということだが）表現に出会うと、私のような「東京物語」などを愛する人間は、いささか顔の赤らむ思いがするのではあるのだが…。

彼の作品は、文学ではなく「歴史講談」だと評されたり、雑談に次ぐ雑談だと指摘されたりもするが、言い得て妙である。だから、堅苦しさを感ずることなく面白く読めるのであろう。「国民作家」の「国民作家」たる所以である。私とは言えば、『坂の上の雲』全6巻だけは古本屋で購入して斜め読みや飛ばし読みを試みたものの、こうした壮大な物語にどうしても生理的に付いて行くことができない。「長編」よりも「短編」の方が肌に合うし、「大説」よりも「小説」が好きだし、しかもその「小説」の中では「私小説」を愛しているような人間であって、付いて行けなくて当然であろう。そもそも、ベストセラーと言われただけでそっぽを向きたくなるようないささか狷介な人間なので、付いて行きたいという訳でもない。

司馬遼太郎本人は、「戦争賛美」と「誤解」されることを恐れて、生前『坂の上の雲』の映像化を断っていたとのことである。こうしたエピソードさえも、作者と作品の評価を高めているのであるが、誤解を恐れずに言えば、「誤解」される要素を十分に含んだ作品であるとも言えるのではあるまいか。敗戦を糊塗し隠蔽し否認する歴史修正主義の潮流に連なる人々も、『坂の上の雲』をきわめて高く評価しているようであるが、果たしてかれらの評価を「誤解」であるとし蹴できるものであろうか。そんな疑問も沸く。君側の奸が駄目な場合も多いが、そんな奸

を側に置く君が駄目な場合もあるからである。先のような事情もあって『坂の上の雲』は死後も映像化されずにいたが、その後NHKでテレビドラマ化され、2009年から2011年の足掛け3年にわたって断続的に放映された。かなりの人気を博したようであるが、私はとうとう何も見ずじまいだった。

ところで、この「坂の上の雲ミュージアム」であるが、こうしたものを作ることを、生前の司馬が許したかどうかはわからない。映像化を断ってきたとのエピソードから推測するに、許さなかったようにも思われるのではあるが…。それはともかくとして、この施設はどのような経緯で設立されたのであろうか。ホームページでの館長挨拶を見ると、「松山市は、まち全体を屋根のない博物館とするフィールドミュージアム構想のもと、回遊性の高い物語のあるまちを目指しています。小説『坂の上の雲』には、近代国家の形成期の世界や日本で起きた出来事、そのなかで生きた人びとの人生など多くの物語が描かれ、現代を生きる私たちに大きな示唆を与えてくれます。本ミュージアムでは、これらをテーマにした展示や様々な催しをおこなうことで、訪れた方々に歴史を学び、未来への思索を深めていただきたいと願っています」とある。ここで言う「大きな示唆」、あるいはここを訪れることによって学ぶことになる「歴史」とは、一体どのようなものなのかが問題となるであろう。

ついでに活動方針についても紹介しておく、「平成19年4月28日、坂の上の雲ミュージアムは、松山のまち全体を屋根のない博物館とする『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想の中核施設として開館しました。小説『坂の上の雲』は、松山出身の秋山好古、真之兄弟と正岡子規の3人の生涯を通して、近代国家として成長していく明治日本のすがたを描いています。本ミュージアムでは、小説に描かれた主人公3人の足跡や明治という時代に関する展示に加え、まちづくりに関するさまざまな活動を行い、訪れた人々が時の流れについて感じ、考える場を提供していきたいと考えています」とある。「暗い昭和」（司馬遼太郎は、これを「奇胎」や「異胎」や「不連続」と表現した）と対比した「明るい明治」、「栄光の明治」が強調されているのである。ここで学ばれることになる「歴史」とは、そうしたものであるに違いなからう。

そのことをよりストレートに示しているのが、ミュージアムの設立の際に松山市が作成した『『坂の上の雲』まちづくりの基本理念』である。後に触れる高井弘之の著作によれば、そこには次のような一節がある。「秋山兄弟が外に対する国のまもりをかためた一方で、正岡子規は国の根幹にあたる言葉という分野での内のまもりをかためたといえるだろう。（中略）この物語によって明治という時代が、まばゆいほど、光り輝いてくるのである。（中略）すなわち、『坂の上の雲』によって、松山のまちづくりを考えると、明治の再評価をその土台とする必要があるだろう。これは、司馬遼太郎さんが松山にのこしてくれた大いなる遺産といえるのである」と。「永続敗戦」の裏返しのような明治礼賛であるが、そうした礼賛によって敗戦が糊塗され隠

蔽され否認され続ける限り、逆に「永続敗戦」状態は今後も続いて行くに違いなからう。

今年 2018 年は「明治 150 年」の年だとのことであるが、安倍首相もそれを意識して、「150 年前明治日本の新たな国造りは、植民地支配の波がアジアに押し寄せる、その大きな危機感と共に、スタートしました」と述べて、当時の「危機感」と「国難」を強調し、それを克服するために「近代化」を推し進めた「日本人」の「志と熱意」を思い起こすよう促している。『坂の上の雲』にも通ずるような、相変わらずの手放しの明治礼賛である。こうした特定の歴史観を、国家的なキャンペーンを通じて国民に押しつけることが、果たして許されるのであろうか。大いに疑問である。「偏向」を声高に批判している人々の主張がとんでもなく「偏向」していることなど、よくある話である。明治の讃仰の行き着く先は、侵略戦争に対する反省の軽視であり、戦後的な価値の軽視であり、その中核にある日本国憲法の軽視であるに違いなからう。

『坂の上の雲』に示された司馬遼太郎の明治観や歴史認識については、さまざまな批判がある。2009 年には、中塚明『司馬遼太郎の歴史観』（高文研）、中村政則『『坂の上の雲』と司馬史観』（岩波書店）、半沢英一『雲の先の修羅』が相次いで出版されたし、その後も高井弘之『誤謬だらけの『坂の上の雲』』（合同出版、2010 年）、原田敬一『『坂の上の雲』と日本近現代史』（新日本出版社、2011 年）と続いている。これらの著作には学ぶところも多かったのであるが、にわか勉強を試みたに過ぎない私などがあれこれ語って知ったかぶりをするのは余りにもおこがましいので、関心がある方は直接これらの著作に当たってもらいたい。

あえて一言だけ触れるとすれば、私が重視しなければならないと感じたのは、「近代の朝鮮」に触れないで明治の日本を語れるのかと言う中塚の批判であり、旅順攻防戦における「愚将」の乃木希典を論じて、日本の陸軍総体における兵士の生命を軽視する風潮を論じなくていいのかと言う半沢の批判である。朝鮮の近現代史に詳しい田中さんも同行していたのだし、宴会の席では向かいに座っていたのだから、彼の司馬評を聞いておくべきだったが、酒のせいもあり失念してしまった。残念である。勿論ながら好意的な評価の著作もある。目にしたなかで面白かったのは、半藤一利『清張さんと司馬さん』（NHK出版、2002 年）と関川夏央『「坂の上の雲」と日本人』（文藝春秋、2006 年）である。『昭和史』（平凡社、2002 年）や『あの戦争と日本人』（文藝春秋、2011 年）などで知られる半藤が、司馬を高く評価しているのがいささか奇異ではあったのだが…。

上記の著作とは別種のものだが、学ぶことが多かったのは大濱徹也の『明治の墓標』（河出文庫、1990 年）である。「庶民のみた日清・日露戦争」と副題の付いたこの本を、区役所の出張所にあたりサイクル文庫から拾ってきたのだが、これが実に興味深かった。後表紙には次のような注目すべき意義深い文章がある。『『栄光の明治』の象徴として語りつがれた日清・日露戦争。しかし、その勝利の蔭に忘れさられた庶民の生活を見きわめず、この『戦争の時代』

を捉えることはできない。傷ついた兵士の手紙、当時の新聞・雑誌記事などから、『愛国』の重荷を負った人々の怨念の世界を解き明かし、翳りある『一等国』大日本帝国の実像をえぐる。本書は、こうした民衆の記録からこの時代を描く画期となった試みである」と。

こうした視点は、残念ながら（あるいは当然ながら）「坂の上の雲ミュージアム」にはまったくと言っていい程見当たらない。結局のところは、「栄光の明治」を称揚しているに過ぎないからである。『明治の墓標』に描き出された世界から浮き彫りにされてくるのは、日清・日露戦争の後に日本が駄目になったのではなく、庶民に多大の犠牲を強いた両戦争の翳りある「勝利」自体が、一見「奇胎」や「異胎」や「不連続」とも見える昭和を引き寄せていったという歴史のパラドックスである。こうした複眼的な視点は、秋山兄弟と子規をただやみくもに顕彰しているだけでは、まったく浮かんでは来ないだろう。私が「坂の上の雲ミュージアム」で感じることになった虚しさは、こうしたところに胚胎していたようにも思われる。

おわりに—私自身に向かう旅へ—

ところで、せっかくであるから子規についても一言触れておきたい。『坂の上の雲』の副主人公でもある彼は、生涯松山藩士にこだわり続け、志士に憧れて身を立て英雄的な人間になるのが夢だったようである。当時の若者が、そうした立身出世の功名心に駆られたとしても何の不思議もないが、彼はそのなかでもとりわけ野心家で、出自としての階級への拘りも強かったと言う。子規の側にいたのは漱石であり、同じ松山出身の高浜虚子であるが、二人はともに子規を冷静に観察している。虚子の観察に関しては、『回想 子規・漱石』（岩波文庫、2002年）が詳しい。

「漱石文学に秘められた男たちの確執の記憶」を副題にした、みもとけいこの『愛したのは、「拙にして聖」なる者』（創風社出版、2003年）を読んで初めて知ったのであるが、明治24年11月の漱石から子規への手紙には、次のようなことが書かれている。「君の議論は工商の子たるが故に気節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞こゆ君何が故かゝる貴族的の言辞を吐くや君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す」。漱石25歳の時の手紙である。気骨と同様の意味である気節の有無を、出自に関わらしめて論じている子規を鋭く批判しているのである。さすが漱石と言うべきであろうか。

旅の最後の日に松山城に登ったが、この日は前日の「坂の上の雲ミュージアム」で感じた虚しさからも解放されて、何とも清々しい朝を迎えた。松山城は、城郭も城壁も美しい城だった。こんなところに来てまで、何か資料はないかと探すのもどうかとは思ったが、城の側にあった売店で中村英利子編著の『漱石と松山』（アトラス出版、2001年）を購入した。何時までも治

らない何とも悪い癖である（笑）。それによると、「漱石が松山の嫌なところをあげるとしたら、おそらくその『よもだ』だったに違いない」とあった。松山の方言である「よもだ」とは、いい加減とかずぼらという意味らしいが、『坊ちゃん』において、「不浄な地」と評され、「船が岸を去れば去る程いい心持ちがした」とまで書かれた松山で、「坊ちゃん列車」が走ったり、「坊ちゃんまんじゅう」が土産となっているのも笑える話ではある。こうしたところにも「よもだ」的なものが現れているのかもしれない。妙に納得できる指摘であった。

ところで、『坊ちゃん』には清（きよ）と言う印象深い下女が出てくる。「拙にして聖」なる人物のように見えるこの清は、虚子の本名である清（きよし）から採ったのだらうというのが、先のみもとの見立てである。そうなのかもしれない。子規と虚子の関係についても、道後温泉が昔は熟田津と呼ばれていたことについても（寺尾さんには、「それは常識だよ」と笑われてしまったのだが一笑）、道後温泉の側にあった松ヶ枝遊郭についても、私の前の仕事先であった労働科学研究所の略称である労研を冠した、松山の「労研饅頭」についても、そしてまた、壮大な「坂の上の雲ミュージアム」を作ったにしては（これは勿論皮肉である！）情けないほどに貧弱な松山市の歴史認識（友好都市の韓国・平沢（ピョンテク）市に、従軍慰安婦問題を象徴する少女像が設置されたことを受けて、本年4月に中学生の交流事業が中止された）についても、あれこれと触れたかったが、締め切りも迫ってきたので、そろそろこの冗漫な文章にも区切りをつけなければなるまい。

子規の後継者と目された虚子のよく知られた作品に、「去年（こぞ）今年貫く棒の如きもの」という句がある。胆力を感じさせる何とも力強い句である。われわれは、正月を挟んで去年と今年を区切ったりしているが、それは世間の約束事に過ぎないのであって（私にはまるで興味が無いが、平成から新元号への改元なども同じようなものであろう）、宇宙や自然の摂理と同様に自分の暮らしや生き方、そして思想や哲学なども、年を跨いだからと言って何一つ変わるものではなかろう。そんな人生の構えを読んだ句なのではなかろうか。これは虚子76歳の時の句だと言うことだが、とてもそんな高齢者が詠んだとは思えない潔さが横溢している。若い頃には、同じ虚子の「春風や闘志いだきて丘に立つ」や山口誓子の「学問のさびしさに堪へ炭をつぐ」などが気に入っていたが、年を取って来ると、先のような句に惹かれる自分があることが実感される。

現代はよく変化の激しい時代だと言われたりする。私自身は、変化にただただ追随する気などまったく無いけれども、変化をそれ自体として丸ごと拒否しようなどとも思わない。日頃肝に銘じているのは、変化と言うものには軽佻浮薄に墮しかねない危うさが孕まれてもいることを、いつも忘れないで生き続けようとするることである。そんな変化の時代だからこそ、そこに

棒のように真っ直ぐで変わらぬものを発見し、見つめ続けようとする姿勢が、ますます大事になっているのではあるまいか。生きる構えに「貫く」ものが無くては、自分の人生に自分なりの決着を付けることさえ難しかろう。古希を迎えた私の心中にも、「棒の如き」に変わらぬものは依然としてある。これからは、それを大事にして最期まで生きていくことになるのだろう。